

資料紹介 南方熊楠蔵『石神問答』『遠野物語』書き込みと柳田宛書簡での指摘の対照表

溝口佳代*¹ 松居竜五*²

『石神問答』

頁数	蔵書中の書き込み	柳田国男宛書簡 (明治44年 3月26日付) での言及	書き込みについての解説
1頁	(左外) 南方熊楠蔵書 (左外～左下) 明治四十三年八月ヨリ九月ノ間 予田辺ニテ未決監ニアル内郵着監中ニテ読之		
3頁	(2行目) ?		『石神問答』の「石を祀る故石神なりと云ふ説は新しく且有力に候へ其信じがたき点之れ有り候」という文に対応している。
13頁		シャクジの起源を石神とする説は、坪井博士あたりに始まり候様信じおり、云々。按ずるに、この説は、『塩尻』巻一 (帝国書院刊行、十三頁) に見えおり候。	
14頁	(2行目) ?		「シヤグジの起源は石の神なりとする御考証には未だ心服仕る能はず候」に対応か？
36頁	(2行目) ?		
51頁～欄外写真下	(4-7行目) 東海道名所記可見 婚ニヒヲオクル儀式 N. & Q. 9th Ser. V. Feb. 10 1900 板出四十七. 表2	シャクシを宗教上の儀に用うること。 靈芝を猫杓子と唱え、丹波とかで旅人の首途に送るを礼とする由、『本草綱目啓蒙』(小野蘭山の) に見えたりと記憶候。日高郡川又官林辺で聞きしに、その辺で今も靈芝を側に置き衣を截つときは、截ち物乱れず、となり。また那智辺で聞きしに、舟師、山神に風を祈るにこれを捧ぐる、となり。欧州にも、婚礼に匙をおくる式あり。一九〇〇年二月十日のロンドン発行『フーズ・エンド・キーリス』に出でたり。むかし石器時代に、石にて作れる天狗の飯匙日本にも多し。主として獣皮をこそげて柔らかにするためのものなり。これを製するには、それぞれ専門家の蛮人今もあり。そのころは貴重なりしもの	

*1 龍谷大学国際文化研究科特別研究生, *2 龍谷大学国際文化学部

51頁～欄外写真下		ゆえ、自然それを贈りし遺風にやとも思われ候。仏家に如意を宝物とするなども、かかることにやと存じ候。(如意を宝とすること、山岡明阿の『類聚名物考』に出づ。)	
53頁	(3行目) 如意? (右外) 霊芝 (右外) 山ノ神ノ杓子 トイフ		『石神問答』の「扶桑在談実記巻二に 美濃土岐郡の旧姓某 二度まで山の子を産みたるに産衣をこしらえて送り 札に杓子を貰ひて家の守りとせしこと見ゆ」という内容の本文に対応している。
62頁	(5行目) ?		『石神問答』の本文は子安観音、子安地藏などについて述べている。
63頁	(4行目) 左文字 (5-6行目) 類聚名物 可見		
66頁	(右外) 今昔 山鹿友 藤ノ郎党ノ条サイノ神 像ノ概ヲ記セリ	サイの神はむかしより地藏様の像なりしにや。『宇治拾遺』、山鹿簾次の郎党、仏を作り供養するに、何仏とも分からぬものを作りしをいうところに、斎の神のようなもの、とあり。また一昨年あたりの『大阪毎日』に、小豆島にて今に祀れる佐々木(飽浦)信胤の騒動(『太平記』に出づ)の根元たりしおさいの方の像の写真あり。全く埒もなき醜女(尼ごときもの)の頭に三角帽子をあてたり。思うに、サイの神像を『太平記』の話によってオサイの方の像といえるならん(切り抜き今に保存しおれり。)	
80頁	(2-4行目) 紀州ニモ 將軍トイフ山アリ		『石神問答』の本文には「信濃奇勝録巻五には 更級郡川柳村大字石川の山頂に將軍塚あり」という内容の記載がある。
84頁	(3行目) ?		『石神問答』の本文には「愛宕山の神体には往々にして東帯騎馬の像あり 何れの時代に始りしものにや 注意すべき思想なり」という内容の記載がある。
86頁		唱門師の役。左義長のほかに、内裏にまいり菊に綿をきせ候由、『嬉遊笑覧』巻一二に見え候。	

86頁'	(6-8行目) 道仏ノ争 ヒニ起レリトイフ	サギチョウの基づくところ陰陽道にありと 論じたるもの、いまだ聞き及ばず、云々。 すでに『和漢三才図会』等に、仏道の争い に起これる由いえるは、多少この意あるに あらざるか。	
111頁	(10行目) 吉備公モ此 内ニアリ	御霊のこと。御霊の中に吉備公あり。その わけ審らかならず。小生案ずるに、たしか 『水鏡』に、光仁天皇即位のとき文室浄三 (天武皇孫)を嬉備公が擁立せんとして藤 原百川等にやりこめられたることあり。こ れよりのち吉備公不平にて面白からず終わ られたりと存ぜられ候。そんなことにて御 霊の中に入れられたることと存ぜられ候。	『石神問答』の本文に は「不遇にて物故せし 数人の貴族朝臣を神に 祭られしやうに候へど も 民間にては或は全 然之と異なりたる御霊 に関する概念を存せし かも知れず候」という 内容の記載がある。
113頁	(5行目) ?		『石神問答』の本文に は「荒神の神像と申す こと 『駿河志料』を 始め折々書物に見うけ 申し候此の神本初の性 質より申さば御像など はあるべき筈 また なく候 へども 是れ亦何れか の蕃神と習合したるも のなるべく候」という 内容の記載がある。
117頁	(7行目) ?		『石神問答』の本文に は「申上度 オホヒト は大人は猿 田彦神なりと云ふ説に 候 此は今日迄因幡志 に見え候外類説あるを 知らず候 普通には大 人とは山人山男 ヤマヒト のこ とを申すかと存じ候 其 大人は小生が久しく研 究しつゝある一題目に 候 唯今迄の材料にて は此物は妖怪にも非ず 狒々にも非ず 唯我々 と全然社會を異にせる 此国の現住民にして 多分に深山に在りて世 人の注意を免れたる少 数の生蕃かと考え候」 という記載がなされて いる。

118頁	(3行目)?		『石神問答』には、「猿田彦を右の大人なりなど、は飛んでも無い事のやうに候へども 些しく考へにばならぬ廉四つほど有之候 其一は猿田彦神は正しく國津神にして 大人も亦日本の先住民の遺孥なりとすれば廣き意味の國津神なること」という内容の記載がある。
119頁	(5-8行目) ミサキ踊リトイフコト忠臣蔵ニアリ	御前は『古語拾遺』などに、某神の御前を祭るということあり。欧人はこれを例の陰莖(女神ならば陰戸)を祭る儀と解し候人多し。小生アストン氏等の囑により、このことにつきしらべたるものあり。表面上のこのみ通知し、あまりに猥なることは原稿を今に和歌山の蔵庫中に秘し置きあり。御存知にもや、五十年ばかり前に英国にて私刊して友人に配りしPayne Knight『キリスト教徒の陰莖、陰戸崇拜』(絵入り)大冊一冊にて大著述、今後かかるものはいかに研究するも出でまじとの評なり。大英博物館にも原板一本あるが、特別閲覧をのみ許すことに候。前日ロンドンにて翻刻一部三十五円ばかりにて売り出で候。仏語訳の本一冊二十円未満で売りに出で候を、小生一月二十日ごろ購求注文送金致し置き候。そのうち着き候わば件の和歌山に秘せる原稿取りよせ、ナイトの著と共に比較候上、「御前考」を作り差し上ぐべく候。かの『仮名手本忠臣蔵』、与一兵衛宅の処に「ミサキ踊りがシュンダルほどに」(『嬉遊笑覧』一二或問付録に述べたれど、明解なし)。このミサキ踊りも、なにか御前に関することに無之やと存ぜられ候。	
123頁	(4行目) 鎮宅靈符	文武のこと。紀州にて、今も妙見祠などに図のごとく駄鈴様のものを、木、銅等にて作り、鎮宅靈符と字を刻し、一方に亀蛇相交わるの図を画きたるもの多く候。(二五〇頁八行)に、地鎮安宅法云々、と『石神問答』に出たり。	

124頁	(3行目) ?		『石神問答』の本文には、「凡そ猿田彦神は一神にして数名あり」そして「是即ち近代の信仰を表現する説なるべし」という内容の記述がある。
128頁	(11行目) 田道？ 〔本文：田村將軍〕村一道		將軍塚に関する『石神問答』の本文中に、「田村將軍の塚」の記載があるが、その「村」の字を斜線で消し、傍線を引っ張って「道」と書き込みがなされている。
129頁	(9-12行目) 將軍地藏 北原又西藏ノモノ大英博物館等ニアリ (左上) ?	勝軍地藏。北京より伝来の真鍮製像（馬にのれり、甲冑を帯ぶ）大英博物館にあり。勝軍（梵名ジャセナと記憶す）、仏經にある名に候。故サー・ウォラストン・フランクス（『大英類典』大一〇板に、この人の伝あり）の嘱により、小生大英博物館宗教部整理の時、その旨名札に書きつけ置き候。	『石神問答』には、戦国時代の信仰仏としての「將軍地藏」に関して記載がある。また、その信仰に関する「武家の帰依最深く候ひき本来女体の摩利支天がいつとなく男体に変せし」という記載について、「？」の書き込みがなされている。
130頁	132頁（4行目）？ （9行目）？：この書き込みは132頁のものであるが、130頁の議論からの続きであると考えられる。	小生は山中氏と反対にて、陰陽崇拜は日本に太古よりあり、天鈿女命 あめのうずめのみこと 、乳を露わすとか、また紐を臍下に垂れて舞う等は陰門を出せしこと（ギリシア語に陰門を露することを臍を露わす、英語にて腹を露わす、と申し候）、また猿田彦の鼻は陰茎のことで存ぜられ候。『燕石十種』第三冊四〇八頁に、義経、僧生坊に兵法は習いましたれど、どう天狗の若衆に成らるるものか、あの鼻の体でも御覧あれ、などあるごとく、西洋でも陰の大なるをいうに鼻を申すが通常なり。菱川師宣の絵に、大兵少陰茎の僧、衆人に裸にされ、小陰を笑わるところ、美童二人これを見て艶差を含み、袖にて口を覆う。傍の人、「ちごたちは、こんなのをすこう」とあるとまるで反対のはなしなり。	『石神問答』には「扶桑略記天慶二年の記事は此の時代生殖器崇拜の迷信起りしことを示すものなるべく候愚考にては本邦にてはかゝる信仰は上古には之れ無く中昔より始まりしこと、存じ候『古語拾遺』のヲバシラの形を溝口に置くは崇信とは言ふべからず禁厭の法なるべく候天慶年中の二神像に至りては正しく其の頃王都 はやりがみ の流行神なるべく候これが猿田彦神の道祖神ならば其の女神は今も諸国に男女二体の道祖神の石像を見ると同じく天鈿女命 あめのうずめのみこと を併祀せしには非ずや」という内容の記述がなされている。

133頁	(3-4行目) ミサキヲ 祭ルトイフコト		『石神問答』には「疫神を祭ること信じ難しとの御説ながら 疫神も疫神を追払ふ神も共に祭られしこと之れ有るべくと存じ候」という内容の記載がされている。
142頁	(4-6行目) 田辺附近 ニモアリ, ソノ処ニ猿 神祠アリ	シュク。田辺近所磯間(古書に名高き処なり)は全村シュクなり。むかし小栗判官, 熊野へ癩病治療のため入湯に下りし時, 宿せしものの子孫を宿 しやく という, と伝う。常人に比して肋骨一双足らずなど申す。	『石神問答』の本文には, 「社は和吉野郡中庄村大字矢治にも宿ノ神社有之候 此國などにはシュクと申す賤民有之」という記載がある。
145頁	(右外) 南方熊楠蔵書		
153頁	(10行目) ?		『石神問答』の本文には, 「那羅延天 ならえんてん には堅牢の義はあれど もと単に強力 ちから の神にして土地との関係はなかりしにや」という記載がされている。
185頁	(6行目) ?		『石神問答』の本文には「民間の左義長又は幸神祭にては正月の注連飾 しるし を焼くことを主たる目的と致居候やうに候 注連飾のシメは即ち占有 しやくう の占にて 縄を延え又は串を挿して一定の地域を一時我用と爲すの趣旨に出でたるものに候へ共同時に外敵を入立てじとする努力をも意味せしにや」という内容の記述がある。

187頁	(3-5行目) 和歌山ニ テハドンドヤ、サギチ ヨヤトハヤス也	『日本歳時記』には、サギチョウヤ、トウ ドヤとはやすと有之候えども、果たして 掘^{よりどころ}ありや。今日聞くとところは多くトンド ヤ、ホチョウジヤというように候、云々。」 紀州和歌山にては「トンドヤ、サギチョウ ヤ」、田辺にては「チョウサヤ、サギチ ウチヤ、ドンドヤ」と申し候。『嬉遊笑覧』 巻10下などによるに、朝廷の左義長の節も 唱門師(名は大黒)来たりて太鼓をたたき、 「止牟止也」とはやす、とあり。また大黒 舞か何かの歌(温知叢書『大黒舞考証』と かいうものにありし)に「ドンドンドと 廓^{くるわい}入り」とあり。『嬉遊笑覧』左義長の条 (巻一〇下)にも、大黒舞はこの唱門師の 左義長より出でたることを知らるとあり、 サギチョウの意はとにかく、「ドンド」は 太鼓ハヤシの音を擬したると存ぜられ候。 それにつけ可笑しきは、田辺にて六年ばかり 以前より、小学教師等、生徒児童を訓戒 してサギチョウを行なうを得ざらしむ。し かるに、なおこれを行なうものあり、鳴り 物を用うるを得ざるゆえ、口頭のみで「ド ンドヤ、サギチョウヤ、チョーサヤ、テン テコテンヤ」と申すようになり候。すなわ ち、太鼓の音が「ドンド」の上に、また近 ごろの聞きようがかわれるゆえか、「テン テコテンヤ」を贅加したるものと存ぜられ 候。下女などが物を叮嚀に言わんとて「御 御膳^{ごぜん}」という類に候。	『石神問答』の本文に は、「日本歳時記には サギチヤウヤ、ドウ ドヤとはやすと有之 候へども 果して據 ありや 今日聞く所 は多くトンドヤ、 ホチャウジヤと 云ふやうに候 小 生が生國播磨にて はこの行事を左義 長とは申さずド ンドと申候」とい う内容が記述され ている。
200頁	(11行目) ヌカ塚	田辺近傍^{あつそ}旦采「朝来」村に「ぬか塚明神」 あり。合祀で全く滅却されおわりぬ。近ご ろまで除夜にこの社へまいること夥し。実 は除夜でなく元旦にまいるべきにて、むか しこの社へ元旦にもっとも早く参りしもの^{ます} を拾い(神よりもらい)、それにて米をは かり大利を得たり。故に元旦にもっとも早 く参り福を獲んとてことに候いき。	『石神問答』の本文に は、「塚の名には注 意すべきもの少な く候 荒神塚、土 塔塚、五郎塚、 老婆塚、聖塚、 行人塚、山伏塚、 仙人塚等は或は 卑説を助くるに 足るべく 又意義 は不明なれど調 子塚、豆塚、小 町塚、飯森塚等 は全国に互りて 多く存在致候 殊 に多きはスクモ 塚又はヌカ塚と 稱するものに候 」という内容が記 載されている。

202頁	(6-8行目)!!!		『石神問答』の「地を割して神の領域と為し崇敬の極其草木に手を触れざるより 百年を出ずして孤島の如き小樹林を現出せしものなるべく 而も其多くは当初土を封じ壇を築きたるものに相違なく候多くの森は何程も平地より高からずと候へども 平衍なる水田の中に立てる所謂田中の森の如きは土をおかざれば到底出来まじきことに候 平原地方に所々の小樹林あり 苟くも森あれば必ず神あるは日本風景の一特色に有之候」という内容の本文に対応している。
204頁	(右外) 熊野ニモアリ	東牟婁郡那智村より高田(非常にさびしき村なり。ある冬日、小生、白昼に行きしも、数里の間、人なく、気味悪くなり逃げ帰りし)に行く間道に、ヨボシ石という所あり。	
221頁		宇賀。田辺の漁夫の話(今年一月二十九日夜聞くところ、筆記のまま)、田辺の海中にウガというものあり。(東牟婁郡の三輪崎にてカイラギという。)蛇に似て、赤白段をなして斑あり、はなはだ美なり。尾三に分かれ、中央は数珠のごとく両方は細長し。遊ぶ時美麗極まるなり。動作および首を水上にあげて遊ぶこと蛇に異ならず。この物を獲れば、舟玉をいわいこめたる横木の前の板(平生この上で物をきることなし)を裏返し、その上にてその尾をきり祀れば海幸多し、長さは二尺ばかり、と。この辺にて舟を作るとき、養子様の立方形を木にて作り、「表見合せ(風の方向をよく見合わすをいう)、艫(舟の後部)仕合せ、中にドッサリ(獲物多く)積み込むこと」と祝す。双六サイは三と四と相反対し、その間に五(ドッサリ)あるゆえなり。さて紙にて小さき雛を二つ作り、大豆に白粉をしろくぬり、墨にて眼鼻かき(男女)顔とす。右三品を、檣柱を立つる横木の側面より穴をあけ、その中に封じ入れ、釘にて固め開くことなし。これを船玉という。	

223頁		ツゲノサイ。熊楠案ずるに、古え道祖神の石を祠れる処にて、石占を問いしこと多し。喜多村信節の『画証録』（国書刊行会の『続燕石十種』第一冊にあり）等に多く見えたり。ツゲは告にて、トを告ぐるといふ意か。	
227頁	(10行目) ?	大日を山にて祭ること。天文 ^{サン・ハビエロ} 中 St.Xavier 尊者の日本記行に見えおり候。生身の大日現わるる、とあり。四国にも大日あらわるる滝あり。	『石神問答』の本文には、「友人稲葉君の話に金雞傳説は泰山の信仰に基くとのことなれど 或は又日天子大日如来などに因縁するかも知れず候 大日は塚にて祭り高山にて祭りしこともあるかと存じ候」という内容の記載がなされている。
229頁	(4-6行目) 掌善又聖天?	勝善は掌善か。毘沙門等に掌善、掌悪の二天子侍立する、と土宜法竜僧正に聞けり。	『石神問答』の本文には、「勝善又は想善と申すも附馬牛村には村社にてあり 又遠野町にも村社にてあり 其他の村々にもきつと一づゝ位はあることゝ存じ候」という内容が記載されている。
235頁		象頭山のことは、弘法大師の『秘蔵記』に、「七金山は妙高山を周匝 ^{とりま} いて圍繞 ^{かこ} むなり。第六、毘那怛迦 ^{びなたか} 山。この山は毘那夜迦 ^{びなやか} 神の頭に似たり」とあり。	

『遠野物語』

1 頁	(左外) 明治四十三年十月四日 南方熊楠蔵		
8 頁	(1行目上) 印度ノ夜叉ノ話ニ似タリ		『遠野物語』の本文には、「幾人か生みたれど、我に似ざれば我子には非ずと云ひて食ふにや殺すにや、皆何れへか持去りてしまふ也と云ふ まことに我々と同じ人間かと押し返して問へば、衣類なども世の常なれど、たゞ眼の色少しちがへり」という内容の記述がある。

53頁		能登には、時 ^{ほととぎす} 鳥盲目の人にて、その弟がおのれにうまき物を食わすを、おのれひがめる心より、弟は一層 ^{ついで} うまい物を食うべしと邪推し、苦しめ、弟終に自殺せしを悔い、今になきありくということ、前年『大阪毎日』にて見申し候。切り抜き今にあれど、只今ちょっと分ならず。	
57頁	(左外) 南方熊楠蔵書		
69頁		オシラサマはもと養蚕神なるべき出は、『東京人類学雑誌』昨年十一月分八一頁[「馬頭神について」]に載せ置き候。	
77頁		田尻長三郎の話は、『曾呂利物語』卷の二、天狗の鼻摘のことといえる条に似たり。「帝国文庫」の『落語全集』にも出でたり。『学生文芸』の「山神とオコゼ」のこと。	
84頁		矢木山は、『続風土記』によるに、三木莊名柄村と尾鷲郷矢の浜村の間なり。今は樹木全く伐り去られたり。北牟婁郡か南牟婁郡なるべし。矢木山とあるはその辺の小字ならん。	
85頁		笑祭は、紀州日高郡和佐村にありし。和佐の笑祭とて名高し。『紀伊名所図会』にも、図を入れて出でたり。里伝に、むかし出雲大社へ諸神召集されしとき、この社の女神大忙ぎで飛び行かんとし、誤って湯巻を社辺りの銀杏樹（現存せしも、例の合祀にてこの社は見る影もなく潰 ^{いこ} されおわれり）に引っ掛けしを、なおすに間あらず、丸裸にて飛び行きしを見て、群神大いに笑いしとのこと、それより笑祭始まれりとぞ。	

89頁		霊代を totem とせるは如何。貴文のこの意味ならんには fetiche (また fetish と書す) なるべしと存じ候。ドイツ人シュルツェの『フェチッシュ篇』とて名高き著述あり。totem は、形あるものにあらず。支那の古書にも「木姓、風姓あり、また竜をもって官に名づく」、わが国にてなお国々楠をもって名とするもの多く (元弘ごろに紀千代楠丸、また正慶中に紀犬楠丸あり。犬楠丸の券書を見るに、文中に犬楠丸、署名に犬楠とあり。かかる略用より熊楠など生ぜしならん)、また諸神の氏子おのおの某の生物を食うを忌む等のことあるは totem の遺風と存じ候。このことは、現今濠州土人にもっとも盛んにて (fetish はアフリカ土人に最も多く行なわる)、攻伐など多くこのことより生ず。濠州土人は、今に男女交合と産子とは何の関係なしと信じ、かの黄帝の母が電を見て感じて孕み、后稷の母が巨人の跡を見て孕みしなどいうごとく、子は神霊ある某物の授くところと固信す。交合するごとに子を孕まず、また人によりやりつづけにやりながら子できぬものあればなり。ドイツの小児は今も鸛 (コウノトリ) より生ずという者多し。これらの信より totem は生ぜしなりとて、英人フレザー氏近著『トテミズムおよび外族婚』と題せる大冊二巻あり。小生は購うこと能わざれども、大意は雑誌の批評にて見申し候。	
95頁	(10行目上) 幸考風		
105頁	(12行目上) 寺ノ美童ノ多キヲホメタル也		
113頁	(10行目上) 熊野マイリ		遠野郷の獅子踊に古くから用いられている歌の曲があるとして挙げられているものの中で、『遠野物語』の本文には、「此銭を如何な銭だと思し召す、伊勢お八まち銭熊野参の遣ひあまりか」という記述がある。